

平成26年度学生自主企画研究成果レポート

研究課題	ABCプロジェクト(Aichi PU Book Com Project) ～次世代の図書館を目指して～
研究代表者	外国語学部 国際関係学科 中西あかり
グループ 構成員	情報科学部 情報科学科 加藤 翔牙 情報科学部 情報科学科 田中 秀明 情報科学部 情報科学科 林 秀和 情報科学部 情報科学科 ミヨーイ

目次

- 第1章 はじめに
 - 第1節 研究背景・目的
 - 第2節 研究の概要
- 第2章 大学図書館をめぐる環境の変化
 - 第1節 伝統的な大学図書館の役割
 - 第2節 進む電子化と学術情報の提供方法
 - 第3節 学生の主体的学習の支援
 - 第4節 大学図書館の変革の必要性
- 第3章 愛知県立大学図書館の現状
 - 第1節 学生アンケート
 - 第2節 考察
- 第4章 他大学図書館訪問
 - 第1節 金城学院大学図書館
 - 第2節 金沢大学附属中央図書館
 - 第3節 名古屋外国語大学・名古屋学芸大学図書館
 - 第4節 他大学訪問まとめ
- 第5章 ハード面
 - 第1節 ブランケット設置
 - 第2節 電子書籍サービスに対する学生の意識調査
 - 第1項 大学図書館の電子書籍貸出サービス
 - 第2項 Kindle 体験イベントの実施
- 第6章 ソフト面
 - 第1節 “人とつながる読書”の提案
 - 第2節 第1回 Book Party

第1項 Book Party について

第2項 第1回テーマ設定について

第3項 当日の進行

第4項 結果

第3節 第2回 Book Party

第1項 第2回テーマについて

第2項 同テーマの図書館展示の開催

第3項 当日の進行

第4項 イベント結果・今後の課題の考察

第5項 しおりフェア

第4節 SNS の活用

第7章 まとめ

参考文献

第1章 はじめに

第1節 研究背景・目的

近年，大学図書館を巡る環境は大きく変化している^[1]．社会全体において情報のデジタル化が進む中，大学図書館における学術情報提供のシステムは根本的な見直しが必要とされている．また，大学における教育に関しては，学生は授業を受けるだけでなく，より自発的な学習や実践の必要性が重視されるようになり，大学図書館にもその支援が期待されている．このように，時代や環境が大きく変わる今，大学図書館は変革の時期に直面している．従来の役割をそのままに，時代に合った新しい側面を多角的に捉え，利用者に提供していくことが求められている．この次世代の大学図書館を模索する議論の場に，学生も積極的に関わっていくことは，より良い図書館の創造につながる我々は考える．そこで発足したのが本研究，ABCプロジェクトである．ABCプロジェクトというのはAichi prefectural university Book Com projectの頭文字をとったもので，ComというのはCommunity, Communication, Commonsといった意味を含んでいる．このプロジェクトを通して，新たな次世代の大学図書館の実現に我々学生も寄与したいと考えている．

第2節 研究の概要

具体的な研究概要として，以下に示す5点を挙げる．

- A) 文献・資料の調査より，昨今大学図書館が置かれている状況を国内外ともに把握する．従来大学図書館が担ってきた伝統的な役割，現在の動向，現代社会から求められている新たな責任を理解する（第2章参照）．
- B) 学生アンケートや図書館職員の方々との意見交換から，本学図書館が抱える課題を明確にする．インタビュー調査の実施（第3章参照）．質問項目，調査方法を工夫し多様化させることで，県大生の生の声を聞けるよう調査する．
- C) 夏季休暇中に各地の優良な図書館を訪問する（第4章参照）．他の図書館と比較することで見えてくる本学図書館の特徴から，その課題・

改善点を発見する。また、訪問で他の図書館の独自の取り組みを知り、そこで得た新しいアイデアや気づきを今後の研究活動の参考にする。

D) A)B)C)で得た知見より、ハード面とソフト面の両側面から本学図書館を考察する。また、それをふまえた企画に取り組み、行動へと移していく（第5、6章参照）。

E) Twitter や Facebook など学生に身近な情報メディアを活用した新しい情報発信の方法を提案する。学生とのコミュニケーションの場とすると同時に、学生も図書館の未来をともに考えていくことの重要性を伝える（第6章4節参照）。

これらの研究活動により、社会的要請に応えた学術機関としての本学図書館のさらなる発展に貢献すると共に、利用する学生にとって、より良い知的創造の場としていくことを目指す。

第2章 大学図書館をめぐる環境の変化

第1節 伝統的な大学図書館の役割

大学図書館が担う伝統的な役割は大きく3つに分けられる。1つ目は、大学における高等教育及び学術研究活動全般の支援である。重要な学術情報基盤として、大学図書館は大学内の核の部分に位置している。2つ目は、社会全体の共有財産としての側面である。学術情報は、検索可能な形態で公開されることにより、市民の生涯学習を支援し、社会全体に貢献する。3つ目は未来に対する知の保存である。脈々と続く時代の中で蓄積された膨大な量の学術的情報は、人類全体の遺産として、後世へと受け継がれていくべきであり、大学図書館はその責任を担っている。これらの基本的機能の重要性は今後も変わらない。しかし、現在の大学及び大学図書館を巡る大きな環境変化の中で、これら従来の役割に加え、新たな責任が求められている。第2節、第3節では現代社会における、大学図書館を取り巻く環境や時代の変化について述べる。

第2節 進む電子化と学術情報の提供方法

第1章で触れたように、近年の社会全体における電子化の進展と学術情報流通の変化は、大学図書館の根本的見直しを必要とする大きな理由の一つである^[2]。インターネットの普及により、誰もがサーチエンジン等で情報を検索し、多様な情報資源に容易にアクセスできるようになった。特に、我々大学生世代にとって、スマートフォンの利用や、ブログ、YouTube、Facebook、Twitter等による情報発信は、習慣として生活の中に根付いている。近年、各大学図書館で進められている学術情報のオープンアクセスも、こういった時代の変化に従うものである。さらに、現代の学生には情報社会で生き抜くための知識やスキルを身に付けることが求められている。これに伴い、利用者の情報リテラシー能力の向上のための積極的支援も大学図書館に対する社会的要請の一つである。

第3節 学生の主体的学習の支援

また、教育の分野においても、近年大きな変容が見られる。大学進学が一般的となってきたこの現代社会は、学生が目的意識を明確に持って大学進学を選択していた時代に比べ、主体性を持って日々の勉学に励む学生が生まれにくい環境であるともいえる。貴重な大学期間をいわばモラトリアムと捉えてしまう学生が増加する中で、自ら問題を提起し、自主的に探究していく学生の力を社会は求めている。同時に、その人材育成の責任も大学及び大学図書館が担うべきとされる。昨今、各大学図書館がその重要性に注目し、場を提供しているラーニングコモンズの普及からも窺えるように、学生の主体性を育むことに対して、大学図書館ができることは実に多いと考えられる。

第4節 大学図書館の変革の必要性

情報社会と教育現場という、近年大きく変容するこれら二つの分野に直接的に関連する大学図書館は、今まさに重要な岐路に立っているといえるであろう。今後は、第1節で述べた伝統的な役割を担いながら、デジタル化した情報社会の中で利用者に学術情報を提供し、さらに大学の中核の組織として学生の学術研究活動を支援していかなくてはならない。様々な課題に直面する今、大学図書館は見直しと改革が必要な時代にあるといえる。

第3章 愛知県立大学図書館の現状

本研究の最終的目標を、本学図書館への還元としていることから、本学図書館の現状把握と課題の明確化は不可欠な過程である。我々は学内アンケートにより学生の声に耳を傾け、そこから利用者の意識と今後の課題を考察した。

第1節 学生アンケート

まず活動を開始するにあたり、図書館に関する学生アンケートを実施した。アンケートの内容と結果を以下に示し、現在、利用者である学生にとって本学図書館はどのような存在であるのか考察する。

- ① アンケート内容：付録A 参照
- ② アンケート結果：利用頻度（図1）/利用目的（図2）

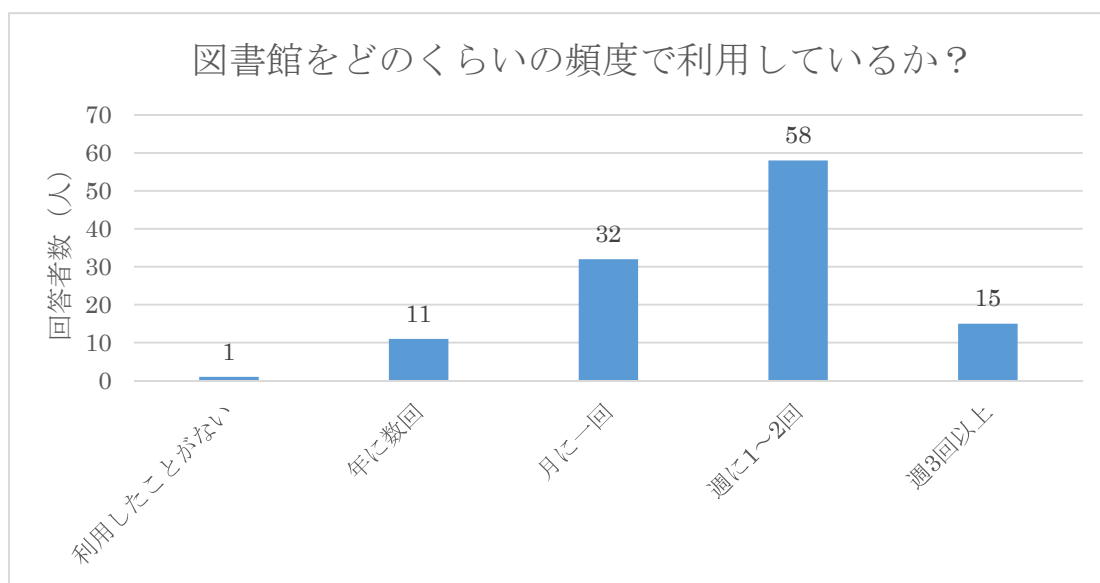


図1：図書館の利用頻度に関するグラフ（回答者総数：117人）

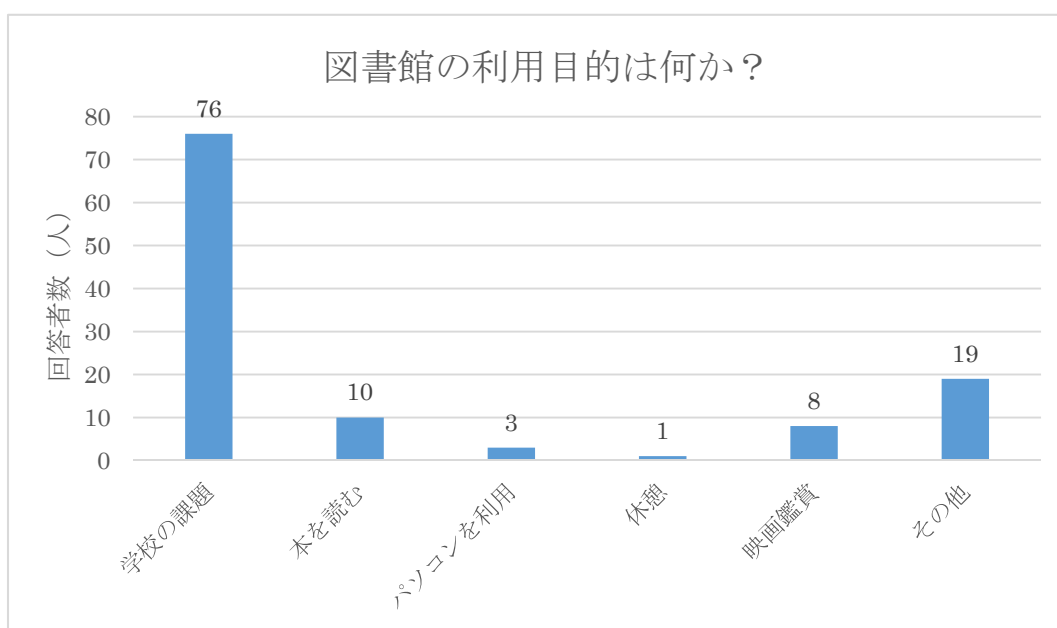


図 2：図書館の利用目的に関するグラフ（回答者総数：117 人）

利用頻度に関する質問からは図 1 の結果が得られた。このことから、本学図書館は学生にとって身近な存在として、大学生活の中に定着していると考えられる。一方で、利用目的を“学校の課題”と回答する学生が圧倒的に多いこと（付録 A/Q2, 図 2）や、図書館イベントや図書館だよりの認知率が低いこと（付録 A/Q4, Q5）から、図書館＝個人の自習空間という意識が強いということが窺える。

第 2 節 考察

第 1 節のアンケート結果より、多くの学生が“身近な自習室”として図書館を利用していると考えられる。学生の学習支援の役割を担う大学図書館のあり方として、快適な自習空間の提供は無論不可欠な要素である。しかし、大学図書館という空間が、学生にとって単なる自習空間にとどまっている本学図書館の現状は、大変惜しいように我々は感じる。学生が、毎日通う大学にある大学図書館に対して、自習空間以上の意義を感じていたのなら、彼らの日々の大学生活はさらに充実したものになるであろう。毎日立ち寄ることのできるその物理的距離は、学問の楽しさの気付きとの精神的距離にもなりうる。我々は本研究において、学生にとっての大学図書館の意義に、自習空

間以上のものとなる $+ \alpha$ を見出し、提供していくことを目指す。それが実現された暁には、本学学生の持つ“図書館との付き合い方”がより深いものとなり、大学図書館は、彼らにとって単なる自習空間にとどまらない、より面白い学びの空間となることが期待される。

第4章 他大学図書館訪問

本章では、我々が行った他大学図書館訪問の内容とその考察を報告する。2014年7月23日に金城学院大学図書館、9月3日に金沢大学附属中央図書館、12月4日に名古屋外国語大学・名古屋学芸大学図書館を訪問し、各大学図書館の特徴や取り組みについて調査を行った。

第1節 金城学院大学図書館

コンセプトを Meets（出会い）と掲げる金城学院大学図書館（以下、金城図書館）はキーワードを明るさ・広さ・静かさ・温かさとし、建物というハード面と人間というソフト面の両方に当てはまる大学図書館を目指している。金城図書館は読書奨励活動に力を入れており、ジャンルに関係なく多くの本を読み、読書習慣を身に着けることを学生にすすめている。本節では、その一環である図書館企画、“本気の一冊ポスター”（図3参照）と“つぶや木”（図4参照）について紹介する。本気の一冊ポスターとは、大学関係者の方々に本気の本をすすめてもらうという企画である。ポスターには顔写真と一緒にQRコードがあり、それを読み取ると、その人のおすすめの本のタイトルとメッセージが出力される。推薦者は、金城の教職員や学生、警備員の方といった学生に身近な学内の人々で、このポスターから大学全体の明るさや暖かさを感じる。また、つぶや木という企画は、テーマを設定し、図書館の利用者がそれに沿ったおすすめの本のタイトルを短い感想と一緒に木の葉の形をした付箋に書いて壁に貼っていき、みんなで大きな木を作っていくものである。誰でも参加可能な企画であり、壁の木は多くの葉をつけ、そのイベントの盛況振りが窺えた。葉一つ一つから、人それぞれの読書に対する姿勢、視点、感じ方が読み取れ、木を眺めているだけで読書欲が刺激された。また、紹介されている本の一部がすぐ下の机に展示されているため、気になったものはすぐに借りることができるようになっていた。



図 3：本気の一冊ポスター



図 4：つぶや木

第 2 節 金沢大学附属中央図書館

金沢大学附属中央図書館(以下、金沢大学図書館)の特徴は、学生の興味関心を引く多様なイベントが開催されていることである。カフェが併設されたブックラウンジが図書館入り口にあり、そこでの軽食が可能となっている。

(図 5)「本を媒体とした出会いと対話の場」という位置付けで、学生たちに親しまれるこの空間では、本に関連した様々なイベントが開催されている。その中でも、本節では“ぶっくとーくかふえ”と“読書会”について報告する。この2つのイベントは、読書好きな学生に対し交流の場を提供することを目的としている。3, 4人のグループに分かれ、本に関する話をすすめながら、テーブル上に用意された大きな紙に、話していることや思いついたこと等を自由に書いていく(図 6)。ぶっくとーくかふえでは参加者が好きな本を持ち寄り、本を紹介しながら他の参加者と交流を深めていく。また、読書会はトークテーマとして事前に選ばれた本を各参加者が読んできた上で集い、本の内容や感想をもとに自由に話を広げていくというイベントである。どちらのイベントでも、読書という行為に他者の視点が入ることで、本の内容に対する理解がより深まる。会話の中で生まれる予期せぬ発見や気付きはイベントならではのものであり、個人の読書とはまた違った本の面白さを感じることができる。(図 7)



図 5：ブックラウンジ



図 6：テーブル上の様子



図 7：イベントの様子

第3節 名古屋外国語大学・名古屋学芸大学図書館

参加者の立場から図書館イベントを考察するため、名古屋外国語大学・名古屋学芸大学図書館「5大学共同図書環 Book Party」に参加した。このイベントではテーマが“アート”と設定されており、外部講師を招いたアートセミナー「知って楽しむ美術入門」を聴講した後、Book Party「発見！アートな本」が開催された。Book Partyでは、参加者が芸術に関わる本を持ち寄り、1グループ4人程度に分かれ、制限時間内に各々が本を紹介し合った。参加者数は、名古屋学芸大学の学生・教員、図書館職員、他大学からの参加者で、約20名であった。実際に本を紹介することにより、本の理解がより深まった上に、参加者同士で交わされる様々な意見から得る新しい発見も非常に多かった。また、本を通じたコミュニケーションの場では、学生同士だけではなく、教員や図書館職員の方々との距離も近く感じられ、イベントの重要性を実感することができた。

第4節 他大学訪問まとめ

各大学図書館の状況や課題、独自の取り組みを知ることができ、他大学図書館訪問は大変意義深いものとなった。様々な収穫があったが、その中でも大学図書館を“出会いの場”と捉える視点が特に興味深かった。本や知識との出会いを提供するだけでなく、イベントを開催することによって大学図書館が人と人を繋げていた。さらに、その出会いが参加者の内でまた新たな興味関心へと繋がっていき、図書館イベントは多くの知的好奇心のきっかけに満ちていた。大学図書館利用者の多くは同年代の学生であり、その特徴はイベントにおいて大きなメリットとなる。参加者同士の間で共感が生まれやすく、また、意見の差異はより刺激的であり、新たな気付きや大きな影響を生むであろう。実際、学生生活の中で、知り合いでない学生同士で本の面白さを語る機会というのは、まずないことである。このように、大学図書館で開催されるイベントには、ここでしか生まれない出会いがある。他大学図書館訪問で得たこれらの気付きを、後期の活動における本学図書館のソフト面へのアプローチで参考にした。(第6章参照)。

第5章 ハード面

第1節 ブランケット設置



館内環境の見直しは、学習空間としての大学図書館のあり方を支えるものとして不可欠なものである。第3章で触れた学内アンケートの回答の中にも、夏場の暑さや冬期の足下の冷えなど、館内の温度設定に関する意見が多くあった。この課題解決のため、金城図書館の取り組みを参考に、本学図書館1,2階に各8枚ずつブランケットを設置した。また、2015年1月6日～21日の期間に、ブランケット利用者に対するアンケートを実施した（付録B参照）。アンケート結果を以下に示す。

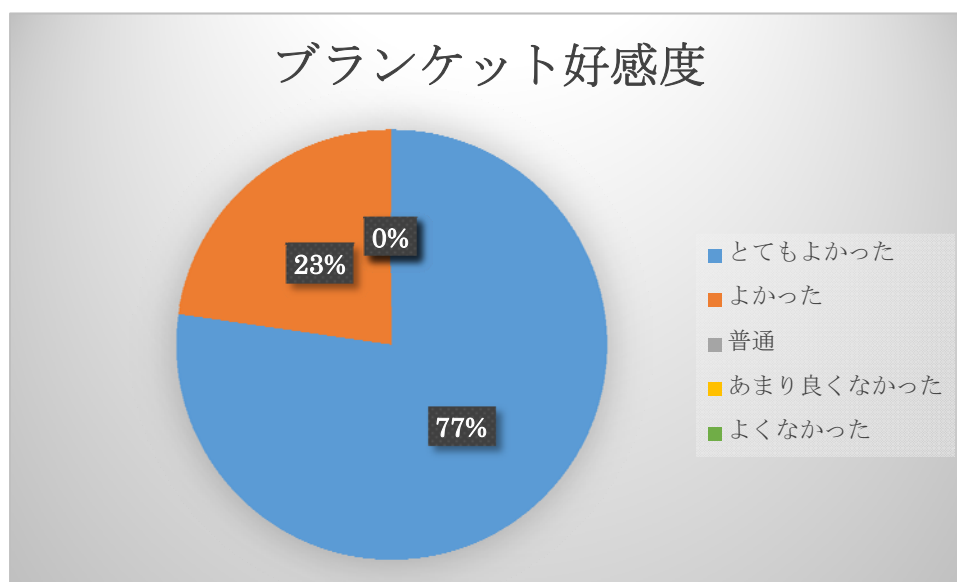


図8：Q1の結果

図8よりブランケットの設置にすべての利用者から好評を得ることができたといえる。その他、Q2やQ3の設置場所や数に関しても「非常に良かった」や「ちょうどいい」等がほとんどであった。また、Q4では「足元が寒いことがあるので置いてあるとありがたい」「ブランケットは普段持ち歩けないので、館内に設置してあるとよい」、「気遣いありがたい」等の好意見と、「洗濯など衛生面が気になる」、「見ず知らずの方が使っているのが不安」等の今後の課題となる意見をいただいた。この結果より、今後のブランケッ

ト設置の継続が学生からも求められているが、衛生面等を考慮していく必要があると思われる。

第2節 電子書籍サービスに対する学生の意識調査

第1項 大学図書館の電子書籍貸出サービス

近年、大学図書館における電子書籍貸出サービス（以下、電子書籍サービス）の導入問題が広く議論されている。電子書籍サービスの普及が進む米国の大学図書館では、Library Journal 誌と School Library Journal 誌による2012年の調査によると、回答した大学図書館339館のうち、95%の大学図書館で電子書籍サービスの提供が行われているということであった。一館あたりの所蔵平均タイトル数は91,900タイトルに達し、サービスの充実が窺える^[3]。一方で日本国内の大学図書館では電子書籍サービスの導入が、米国より大きく立ち遅れている。2010年に慶應義塾大学メディアセンターが実施した電子学術書利用実験プロジェクト^[4]を筆頭に、近年いくつかの大学図書館にて電子書籍サービス導入に向けた取り組みが行われてきたものの、本格的な導入に成功している例は非常に少ない。国内の電子書籍サービス導入を困難にしているものとしては、ネット環境、電子書籍そのものがもつ問題点、デバイスの提供方法、学術的コンテンツの不足等の課題が挙げられ、これらの解決が急がれる。

第2項 Kindle 体験イベントの実施

大学図書館における電子書籍貸出サービス導入に向け、前項で挙げた課題の解決に加え、利用者の意識にも振り返りが行われるべきであると我々は考える。近年普及が拡大している電子書籍だが、電子書籍の利用率及び電子書籍専用端末の所有率から、一般的に深く浸透しているというにはまだ早すぎるという推測もできる^{[5][6]}。このような考察を背景に、本学図書館館内にて電子書籍に対する利用者の意識調査を行った。図書館一階リベラルアーツ前に、Amazonが販売する電子書籍専用端末Kindle Voyageを三台設置し、オリジナルペーパー（付録C）とともに展示した。

電子書籍に触れた意見・感想を利用者に記入してもらい、その結果を考察した。回答には、「電子なのに目が疲れないう工夫されているため長時間利用してもあまり苦にならない」、「使用環境を整えば是非使ってみてみたい」等、電子書籍に対する好意的な意見が多くあり、サービス導入は利用者の読書量の増加に繋がると期待できる。その一方で「使いこなせなさそう」「本を増やしたほうがいいのでは」といった意見もあり、デジタルに対する苦手意識や、紙媒体の書籍に対する強い親しみが窺えた。以上から、電子書籍サービス導入に関する今後の課題として、利用者の意識に着目しつつ、デジタルとアナログの比率を模索していく必要があるといえるだろう。また、導入の際には、すべての利用者がそのサービスを楽しむよう、利用者の情報リテラシー能力の向上を大学図書館側が支援していく必要性も認識できた。

第6章 ソフト面

第1節 “人とつながる読書”の提案

本学図書館のソフト面の見直しを目的に開催した図書館イベントについて報告するにあたり、本節では、他大学図書館訪問の考察（第4章4節）をふまえ、人とつながる新しい読書のかたちを提案する。本来、読書というものは一人で行う行為である。しかし今回我々が提案する“人とつながる読書”においては、従来個人の中で完結していたものに対して、仲間と互いの知や考えを持ち寄り議論することにより、さらに広く深い理解や考察が得られるであろう。また、この経験により培われると期待される、参加学生の主体性や協調性、物事を多面的に捉える力というのは、昨今社会で求められる人材の要素（第2章参照）とも合致するため、人材育成という本来の大学の目的も付随的に果たしているといえる。このように、昨今の社会的要請と、イベントが参加学生に与える影響を意識した上で大学図書館イベントを計画することで、より有意義なものを開催したいと考えた。



第2節 第1回 Book Party

第1項 Book Party について

Book Party とは、テーマに沿った本を各参加者が持ち寄り、3、4人のグループに分かれて話をするというイベントである。本や人とつながり、新しい好奇心と出会うことを目的としたこのイベントは、現在各地の大学図書館で開催されており、我々は本学図書館においてもこのイベントを浸透させていきたいと考えた。

第2項 第1回テーマ設定について

第1回は「自己紹介代わりにする本」というテーマで開催した。このテーマの設定には大きく二つの理由がある。一つ目は第一回目のイベントということもあり、学生に気軽に参加してもらいたいという思いから、幅広いテーマを設定した。本の話をつきかけに、話が様々な方向に広がっていく楽しさを参加者に感じてもらえるようなイベントにしたいと考えた。二つ目の理由は、このテーマでの本の選別は、自己を見直すきっかけになるということが挙げられる。イベント参加において、自己を客観的に見つめ直し、自分と本との関連性を考える過程は、自己を深く知ることへつながり、有意義なものになると期待される。

第3項 当日の進行

当日は15名の参加者が集まった。3名ずつでグループに分かれ、30分で2回ローテーションし、異なるメンバーで話せるようにした。イベント後は参加学生に向けたアンケートの実施、図書館会議室にて約1時間の懇親会を開催し、参加者からフィードバックを得た。

第4項 結果

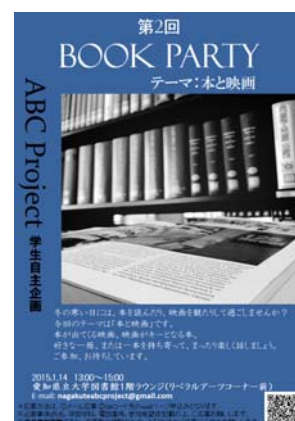
約2時間のイベントの間、どのグループも話が尽きることがなく、大変充実したものとなった。参加者同士が本をつきかけに親しくなり、その環を広げていく様子から、図書館でイベントを開催することの意義を

実感することができた。学生アンケートの回答では、イベントの定期的な開催を求める声が多かったため、今後も継続して図書館イベントを行っていききたい。

第3節 第2回 Book Party

第1項 第2回テーマについて

第2回目は「本と映画」というテーマに設定し、参加者が持ち寄るものを、映画に関連する本だけでなく、本が出てくる映画も可とした。趣味の側面と芸術・教養としての側面を合わせ持つ映画に、イベントのテーマを設定することで、参加者同士が広く深く話し合えることを期待した。



第2項 同テーマの図書館展示の開催

第2回 Book Party の開催と同時に、館内一階映像資料コーナー前にて関連展示を開催した。本学図書館が所蔵する映像資料の中から、本が出てくる映画を10本ピックアップし、映画全体のあらすじと本が出てくるシーンを紹介した。イベントの広報に加え、図書館という本に囲まれた空間で、本が出てくる映画を観るという特別な映画との出会いを演出することを目的とした。(付録D, 図9, 図10)



図9：展示会の様子1



図10：展示会の様子2

第3項 当日の進行

当日は10名の参加者が集まり、3, 4名のグループに分かれて、それぞれが持ち寄った本や映画を紹介し合った。イベント後にはアンケートを実施し、当日参加した感想に加え、今後のイベントの方向性や図書館の現状に関する意見も求めた。



第4項 イベント結果・今後の課題の考察

持ち寄るものを本と映画としたことで、前回にも増して話が広がり、参加者同士が互いに良い刺激を与え合ったことがアンケートの感想欄から読み取れた。また、参加者からのフィードバックから、今後の活動における館内映像資料コーナーの改良の必要性も認識することができた。映画は多文化理解の助けや感受性を育むものとして、学生の学びに欠かせないものであると私たちは考える。本大学では、その地理的条件もあり、多くの学生が授業の空き時間に図書館で映画を鑑賞することから、学生にとって映画への入り口が身近であると言える。そのような特徴を持つ本学図書館にて、館内の映像資料コーナーを見直し、充実させることは、大学図書館という場所を、より多くの学びの機会に満ちた空間へと改良していくことに繋がるであろう。

第5項 しおりフェア

2015年1月より、図書館イベント「しおりフェア」を実施し、オリジナルのしおりを図書館カウンター横に設置・配布した。Twitterと連動させることで、利用者にお気に入りの本の中のフレーズを投稿することを呼びかけ、集まったフレーズをしおりに印刷した。



このイベントは、利用者に本との出会いを与える小さなきっかけとなり、利用者の読書ライフをより良いものにするに期待される。また、イベント広報は **Twitter** とポスターの掲示にて行った。このイベントは来年度にわたって継続して行っていく予定であるため、現在進行中である。

第4節 SNS の活用

今回の活動における広報手段として **SNS (Facebook, Twitter)** を活用することにより、図書館と利用者の距離を縮め、学生にとって図書館がより身近な存在となることを目指した。学生に身近な **SNS** を利用したことで、多くの学生が **Facebook** や **Twitter** をフォローし、図書館に関する情報に触れる機会が増えたといえる。また、**Facebook** を見て図書館の活動に興味を持った学生数名からコンタクトがあり、活動の紹介や、ミーティングへの参加の希望を受け付けた。今回の取り組みで、多くの学生が図書館の情報や活動に対して興味を持っていることが窺えた。今後も **SNS** による広報を継続して行い、お互いの声が届きやすい場を設けることを課題としたい。図書館からの情報発信だけでなく、利用者の学生の声に耳を傾けることによって、よりニーズにあったものを提供していくことを目指す。

第7章 まとめ

今回の自主企画研究では、従来の大学図書館の役割や、社会からの新たな要請を調査・考察し、大学図書館の本質の部分を見つめ直した上で、本学図書館に還元していくという流れで活動を進めてきた。

我々は今回の活動を通して、大学図書館が学生にとってどれほど重要な場所であるのかを強く感じる事ができた。学生にとっての大学図書館という空間は、受け継がれてきた知の遺産に囲まれながら学問を突き詰める場でもありながら、本や人と出会い、未だ見ぬ世界への入り口にもなるのである。図書館のこれからを考える際には、社会からの要請や未来を見据えた視点も無論不可欠であるが、学生ひとりひとりの“図書館との付き合い方”を想うことも重要な要素になると我々は考えている。今後も引き続き、学生の声に耳を傾けながら、より良い図書館像を模索していきたい。

大学図書館の発展を目指す本研究において、残された課題は実に多い。短期間で解決できるものから、長期的な視野を持って取り組むべきものまで、多様な課題がある。イベントの定期的開催や学生の意識調査等、我々が計画できるものは引き続き行動に移していきたい。一方、館内設備や、サービスシステムの根本的変革といった、学生だけの力では解決が不可能な課題もある。だが、その類の課題に対しても、調査・考察を繰り返し、学生ならではの視点を図書館に届けていくことで、微力ながらもその発展に寄与していく所存である。

さらに今後は、情報発信に力を入れ、学生が図書館を考える重要性をより多くの本学学生に伝えていきたいと考えている。学生の学習空間である図書館について学生自身で考えるということは、図書館の発展への貢献であると同時に、自らの学びの姿勢に対する振り返りでもあると我々は考える。そして、学生同士で協力し、図書館という学習コミュニティを改良していくことは、同じ大学で学ぶ同志を互いに高め合い、学問に対する意識を向上させていくことへと繋がるであろう。このように、引き続き活動を続ける中で、図書館を中心に学生の環を広げながら、その発展に貢献していきたいと考えている。

謝辞：この研究活動においてご尽力して下さった愛知県立大学長久手キャンパス図書館の職員の方々と、インタビューにご協力いただいた金城学院大学図書館、金沢大学附属中央図書館の方々に、この場を借りて深く御礼申し上げます。

参考文献

- [1]大学図書館の整備について（審議のまとめ）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/1301602.htm
- [2] 大学図書館の機能・役割及び戦略的な位置づけ（平成 22 年 12 月科学技術・学術審議会 学術分科会 研究環境基盤部会 学術情報基盤作業部会）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/attach/1301607.htm
- [3]国立大学図書館協会，“平成 24 年度調査報告”，
<http://jitensha-anzen.com/problem/problem02.html>，2012.
- [4]慶應義塾大学メディアセンター，“電子学術書利用実験プロジェクト”，
<http://project.lib.keio.ac.jp/ebookp/node/6>，2014 閲覧.
- [5]価格ドットコム，“No.065 電子書籍についてのアンケート”，
<http://kakaku.com/research/report/065/>，2015 年閲覧.
- [6]インターネットメディア総合研究所,『電子書籍ビジネス調査報告書 2013』, 2013.

付録 A

図書館利用に関するアンケート

学部 _____ 学科 _____ 専攻 _____ 学年 _____

Q1. あなたは図書館をどのくらいの頻度で利用していますか。

利用したことがない 年に数回 月に1回 週に1~2回 週3回以上

Q2. Q1で“利用したことがない”以外を選択した人にお聞きします。

図書館では主に何をしておこなっていますか。

学校の課題 本を読む パソコンを利用

休憩 映画鑑賞 その他()

Q3. 図書館のホームページを利用していますか。

利用したことはない 何度か利用したことがある 頻繁に利用している

Q4. 図書館開催のイベント(展示等)について知っていましたか・知りませんでしたか。

知らなかった 知っていたが参加したことはない 参加したことがある

Q5. 図書館が発行している図書館だよりを読んだことがありますか。

一度も読んだことがない 何回か読んだことがある 毎回読んでいる

Q6. 図書館にどんなジャンルの本があると嬉しいですか(複数回答可)

日本文学 外国語文学 時代小説 人文・思想 社会・政治

ノンフィクション 歴史・地理 ビジネス・経済 科学テクノロジー

暮らし・健康 医学・薬学・看護学 コンピュータ・IT 趣味・実用

アート・建築・デザイン スポーツ・アウトドア 資格・検定・就職 旅行

ガイド・マップ 語学・辞事典・年鑑 楽譜・スコア・音楽書

エンターテイメント 教育・子育て その他()

Q7. 県立大学図書館への意見・要望・不満等があればお書きください.

()

ご回答ありがとうございました. 研究メンバー一同.

(

図書館設備に関するアンケート

学部 _____ 学科 _____ 専攻 _____ 学年 _____

我々自主企画 ABCProject は研究の一環としてブランケットを設置させていただきました。ブランケット利用時にはアンケートにご協力をお願いします。

Q1. ブランケットを利用してどうでしたか

とてもよかった よかった 普通 あまり良くなかった 良くなかった

ブランケットの設置について

Q2. ブランケットの設置場所はどうでしたか

とてもよかった よかった 普通 あまり良くなかった 良くなかった

Q3. ブランケットの数はどうでしたか

多い ちょうどよい 少ない

Q4. ブランケット設置についてご意見・ご感想をお書きください

()

Q5. 今回一時的にブランケットを設置させていただきましたが今後、また設置することになったらどうされますか

利用したい どちらともいえない 利用したくない

Q6. 図書館の設備についてなにかご意見・ご感想があればお書きください

()

ご回答ありがとうございました。図書館研究メンバー一同。

付録 C

大学図書館の

これからを考える！

昨今、注目されている書籍の電子化。最近 Kindle で読書を楽しむながらリモ通学する県大生もよく見かけます。

各地の公共図書館でも電子書籍の貸し出しが試験的に導入されるなど、増々拡大する電子書籍市場。その波はいま大学図書館にまで来ています。

大学図書館における電子書籍の本格的な導入には、まだ多くの課題が残っているのが現状です。しかし、図書館で電子書籍デバイスを借りたり、電子教科書で授業が行われたり。そんな未来は着々と近付いてきているのかも。

大学図書館が大きく変わろうとしている今こそ、私たち学生が図書館を考える時！



大学図書館における電子書籍サービスの導入

あなたはどう思いますか？

～ Kindle 体験イベント ～

電子書籍サービス、要る？要らない？

電子書籍サービスは、どのように私たちの図書館ライフを変えていくのだろうか？
そもそも、電子書籍サービスって本当に必要？



「電子書籍に賛成！」派

- 機能によって、借りた書籍でもメモやハイライトができる
- 場所をとらない
- 何冊借りても持ち運べる
- 汚れや破れを気にすることなく、古書が読める
- ネットワークとリンクしているから、検索やデータ参照が簡単かつ豊富
- 提供方法によってはPC、タブレット、スマートフォンなど、複数の媒体からアクセスできる

「本当に要るの？」派

- 手触り、ページをめくる行為など、紙ならではの読書の楽しみがなくなる
- 電子書籍は慣れが必要
- 読後の満足感が得られにくいのでは？
- 提供方法や書籍の種類によって、ネットワーク環境がないと読めないものがある
- 電子書籍は、バラバラ見て必要な箇所だけを素早く読み取る「拾い読み」に向いていない

もしこれが導入されたら…

と、未来の図書館ライフを想像しながら、実際に使ってみてください。

現在、ABC project では、大学図書館における電子書籍デバイスの導入に対する利用者の意識調査のため、電子書籍デバイス Kindle を3台、期間限定で設置しています。

アンケート実施中

近年ようやく動き出した大学図書館における電子書籍導入の取り組み。大学図書館がより快適な学びの空間となるために必要なのは、利用者であるわたしたち学生の声です。

- Kindle を使った感想、
 - 電子書籍に関する意見、
 - あなたが描く理想の図書館像、
- なんでもかまいません！

あなたの思ったこと、是非聞かせてください！

平成26年度 学生自主企画研究「ABC project」

Twitter : @ABCproject_apu /

Facebook : 「学生自主企画 ABC project」で検索

付録 D

図書館展示

MOVIE & BOOK

本が生み出す人生のドラマ

“本”というのは物語が書かれたものであるが、不思議なことに、本そのものが物語を生むこともよくある。

一冊の本をきっかけに始まる恋愛
読書会で芽生えた友情
近所の本屋で働くあの書店員
図書館に隠された誰も知らない秘密

本の側にはいつもドラマがある。
今回の展示は本が出てくる映画をピックアップ。
本に囲まれた図書館という空間で、本の映画を観ませんか？

1月14日(水) 図書館イベント Book Party も開催予定！



平成26年度 学生自主企画 ABC project